

平成 28 年 11 月 22 日 鶴岡市庁議室にて

榎本政規鶴岡市長

石原純一鶴岡観光協会会長

佐藤ひろこ歴まち meeting 代表

### ポイント

- ◎鶴岡の歴史的な遺産に光を当てて、守り育てようという機運が市民の中に醸成されてきた
- ◎『自学自習』鶴岡市民が常に学ぼうという意欲、自らが積極的に動いていこうという機運が非常に大きな流れとして市民の中にある
- ◎まちの真ん中に城址公園があって、この立地他の街の人から見ると、奇跡ですね、セントラルパークですねと言われる
- ◎こんなに素晴らしい建物が鶴岡にあったんだと、一昨年初めて知りました。あるということをもみんな知らない。みんなに見せてあげたいという気持ちに
- ◎『自学自習』という、そういう下地があるからこそ、歴史的なバックボーンを土台として、いろんな文化を作り上げていこうという、そういう思いは私自身の中にあった
- ◎「市長、なんでコンパクトカーでなくて、スポーツカーでなければならないのですか？」
- ◎オート三輪みたいな形で、市民が一番前で、地域と行政が後ろの両輪で前に進んでももらえば良い

聞き手) 平成 20 年に歴史まちづくり法ができて、今年は 8 年目です。この間 60 近くの市町村で取り組みが進められ、地方自治体にとって魅力あるプロジェクトとなっているように見受けられます。私から見て、これらの取り組みには、二つの特徴を感じています。一点は他の都市計画のプロジェクトに比べて、市長のトップダウンの傾向が強いことです。どのまちでも取り組みの前面に市町村長が出てきていますし、歴史まちづくりサミットもその現れの一つです。もう一点はその逆で、地域の人参加が積極的になされていることです。これには法律の仕組みとして、歴史的風致維持向上計画を策定する際に地域の人活動を組み入れていくことが必須で、行政だけではできない仕組みになっていることも背景にあると思います。実際に計画策定の協議会などで伝統産業に従事されている方などと意見交換をしながらプランを練っています。トップダウンの強いリーダーシップの下で、地域の積極的な参加によって進められているというのが、歴史まちづくり計画の特色ではないかと思っています。そこで、トップダウンの責任者である市長がどのような思いで取り組みを始められたかなどについて、直接そのお考えをお伺いし、その結果を全国の自治体にお伝えしたいと考えました。市長の思いを聞かせていただきたいと思っています。

また今日は民間のお二方にご参加いただいたのも、市長の思いがどういう風に伝わっているのか、お

聞かせ願えればと思います。

## 1. 歴まちに取り組んだ動機

聞き手) まず市長にお伺いします。もともと鶴岡市は文化財の施策をかなり熱心に進められていたと思いますが、8年前に歴史まちづくり法ができて、かなり早い段階で取り組まれました。まずはその辺の動機をお聞かせいただければと思います。



榎本政規鶴岡市長

市長) まず、一つは歴まち法の前に、前の市長がまちづくりの根幹としてコンパクトシティを進めるという考えで、公共施設を外に出すと市民が使いにくくなるので市街地を外側に広げず、まちなかを大切に、病院などいろんな施設を市の中心に置いたという経緯があります。

そして、鶴岡市の城下町としての本拠地が鶴岡公園の中心部だとすれば、ここにある鶴岡市の歴史的資産を大切にしていかなければならないという考え方が根底にあり、それは、前市長からずっと職員のみなさんが受け継がれてきたものと思っています。

また、鶴岡市は、平成17年10月に合併していますが、出羽三山や出羽三山の門前町である手向地区の宿坊街、明治・大正とシルクで鶴岡の近代産業を牽引してくれた松ヶ岡開墾場の蚕室群など、市の中心部以外にも貴重な歴史的なものが受け継がれています。松ヶ岡については、富岡（製糸工場）が世界遺産なら、うちの蚕室群も日本遺産は十分、世界遺産に認定

されても良いんじゃないかという気がしております。今年9月に天皇皇后陛下が松ヶ岡に行幸啓されたときも蚕室をご覧になられて、良くぞ残してくれたと、これは残して行ってくださいよとお言葉をいただきました。こういう歴史的な建物や歴史そのものを後世に伝えていかななくてはならない。それは今の時代を生きる我々の責任であると思っています。行政としてそういう思いで取り組んできた時に、まちづくりを支えてくれる今日おいでになられた石原さんや佐藤さんなどが、市民レベルのいろいろな活動を通じて、鶴岡の持っている歴史的な遺産に光を当てて、それを守り育てていこうという機運が市民の中に醸成されてきたのだと思っています。それが相まって丁度いい時期に、国がこういう制度を作ってくれた。歴史的な建物とか風致を維持していくのはお金のかかることなので、非常にいい制度を作って頂いたと思っています、手を挙げさせていただいた。

## 2. 市長部局と教育委員会の調整について

聞き手) 我々が法律を作ったとき、国交省はとんかちを叩いて都市計画をしてまちづくりをするところですけども、一方で文部科学省、文化庁は文化財をきちんと保存しないといけないところ。従来はどっちかというところ。道路造ったら文化財を壊す、広げたら建物を壊すと、必ずしも仲は良くなかった。ところが残された歴史・文化財を核とし、その周辺のまちづくりはちゃんと都市計画でやらなければならないという役割分担で、手を握って作ったのがこの法律です。それは国同士の話ではなくて、市役所の中でも、市長部局に建設、都市計画部隊がいて、教育委員会に文化財部隊がいて、そ

のあたりで歴まちに取り組んだ時に、特に工夫したことや、ご苦労したことはございますか。  
市長) 鶴岡だって、あちこち掘ればいろんな遺産が出てくる。裏山を掘っただけでも、鎌倉時代のものとか、その前の頃の瀬戸物のかげらとか茶碗が出てくる。出てくれば「すまん文化財、ちょっと待て」と事業が止まるわけです。それは事業者にとってやはり負担になる。

また、例えば松ヶ岡開墾場の場合、蚕室群は酒井家、土地は地元の所有でしたが、維持してゆくのに経費がかかる。保存のために40年かけて修理して、40年後には、40年前にやったものをまた直すということになる。保護してゆくことは大切。それと同時に活用が進むよう歴まち法のように国の方で国交省と文化庁が一緒になって支援してくれる仕組みが出来たことはありがたい。

聞き手) 組織の中で、人事交流するとか、何か工夫はございましたか。

市長) 教育委員会、都市計画の職員は行ったり来たりしています。人事はそうやって回していますので、人事の上で問題ないと思います。市の中では教育委員会サイドであっても、トップダウンでいいからやれと指示してかなり推し進めています。

聞き手) 石原さんは、櫓の建て直しで何かございますか。新聞記事を拝見しました。

石原) 私も市長さんが言われたように、専門用語を知らなかったものから、お城の復元という言葉を使ったんですね。そしたら「釘一本から江戸時代と同じ仕様なんです」と言われたので、あわてて復元という言葉から、広辞苑を引っ張ってきて、再び建てるってということで、なるべく忠実に再現する「再建」にしました。それで大方の許可をいただいたかと思っておりましたら、教育委員会から、「あそこは埋蔵文化財包蔵地なので、必ず何かありますので、ゆっくり調査しなければなりません。その費用は全てあなたたち持ちです」と言われました。私が「それでもやりましょう」と言ったら、「基本的には触って欲しくない」と言われてしまいました。要するに教育委員会は「ここは触れないで欲しい」と。カチンと来ましたので「それは放置のままということでしょうか」、と聞いたら、「そうかもしれません」と言われました。今年に入り、「最近文化庁も歴史的な価値のある文化遺産を活用するという言葉が入ったので、そこは少し変わってきています」と言われました。「文化財を活用する」という言い方ならいいですよ。



石原純一  
鶴岡観光協会会長

聞き手) それが歴まち法を含め最近の行政の最大の効果だと我々も思っております。

### 3. 鶴岡市民の参加意識

聞き手) それが最大の効果だと我々も思っております。実際に、民間の方々や地域の方々がどうやって参加していくというのがポイントだと思います。歴史まちづくり計画の基本的な考え方は文化財とか、歴史的な建造物、史跡があった中で、それは今までの有形文化財なんです、その中で市民が活動して、例えば祭りや伝統産業がそういう歴史的資産を活用して動いていくことに、「歴史的風致」という名前をつけて、保存というか、価値のあるものを活かして維持しかつ向上させて行こうというのが基本的な考え方です。今までの日本に無い新しい考え方です。そうすると計画に作るときに何が必要かという、参加して活力を持っている人たちが、計画作りに参加しないとできないのです。その意味で、

都市計画制度の中でかなり画期的な仕組みです。住民参加と簡単にいいますが、本当に、動いている人が参加しないと計画ができないというのがポイントです。市長にお聞きしたいのですが、市民の方をどうやって計画に巻き込むのでしょうか。そして次のステップで、市民を活かしていくための、お考えがありますでしょうか。

市長) 平成 26 年度の都市景観大賞でも評価いただきましたが、市民の皆さんにはいろんなまちづくりに参加いただいています。古いまちなみを市民の手で守っていこう、守り続けていこうということで、佐藤さんもそうですし、ワークショップなどいろいろなことに参画を頂いております。市の所有物であれば、市としていろんなことができますが、民間の建物を上手く活用しながら残して行こうとするには、やっぱり市民のみなさんに参画していただかないといけません。行政が大上段にドンと構えているだけでは進まないと思います。トップダウンだけでなく、市民の皆さんの力でプロジェクトを作ってもらってボトムアップしていただければならないと思います。その点では鶴岡の市民のレベルは高いのではないかと思います。いろんなシンポジウム、ワークショップに参加いただいて、まちづくりに積極的に参加していこうという機運があるということは事実だと思います。それは、言ってみれば、そこに住む、致道館の教育、酒井家の自学自習という考え方があって、私自身、非常に誇りに思っておりますが、高等教育機関がいっぱいあるおかげで、鶴岡市民が常に学ぼうという意欲、自らが積極的に動いていこうという機運が非常に大きな流れとして市民の中にあるのではないのでしょうか。

聞き手) もともと鶴岡のまちの方々、そういう自分で学ぶという向学心をもっているということなののでしょうか。

市長) そうだと思います。

社会人を対象に全国から各界のトップクラスの研究者や専門家を講師に招く致道大学という市の事業があり、いろんなところから知恵を借りていますが、これはもう今年で 20 年になります。変わったところでは、ここは冬場の雷が日本で一番多いということで、雷をテーマにしてさまざまな視点で雷の専門家を集めて雷サミットという

ものを開催しています。また、致道大学がご縁で市民交流も行ってきた丹波篠山の篠山市からは、まちづくりも含めて、災害協定の締結などいろんな交流をしているところもあり、そういうところに市民が積極的に参加していただいている。致道大学には今年も 100 人くらいの塾生が参加してくれました。

石原) 歴史の好きな人が非常に多いです。町内会毎に歴史講座がありますし、私も時々呼ばれるのですが、本当に各年代の大勢の方が公民館一杯になります。

聞き手) それが、歴まち meeting のような団体ができるきっかけや素地になっているのでしょうか。

石原) すっと入れます。

聞き手) 致道館でも論語教育をずっとやっておられますよね。そういう素地もあるのでしょうか。最初から、小中学生がやられてますよね。そこで、そういう教育で素地



藩校致道館



少年少女論語素読教室

ができてくると歴史に対するハードルが低くなってきて、すっと入っていけるようになるのでしょうか。

市長) 市では小学生全員に庄内論語を副読本として配布しています。石原さんなんかも、論語は得意でしょうが、児童生徒への配布には、南洲翁遺訓を全国に広めようとした庄内藩の武士の思いが入っているのではないのでしょうか。

石原) 庄内論語も一応小学生に配布しているのですが、ねらいの一つには父母の皆さんに読んで貰おうと、意味まで書いています。それを親子で読んで貰えれば深い教えがわかります。

市長) 南洲といえば変ったところで、西郷南洲さんの写真、肖像画が市内にいっぱいあるんです。我が家にも飾ってある。このことを天皇陛下からも「市長さん、背景が分かりますか」と尋ねられたのですが、何故なのでしょう。

石原) やっぱり、戊辰の役の戦後処理の仕方ではないでしょうか。会津藩に対する長州藩の苛烈な仕打ちに対して、西郷さんは、「庄内藩は敵ながらあっぱれである。最期まで幕府に忠誠を尽くした。侍だけでなく、農民、町民も皆で」賊軍扱いはされたが、西郷さんからは「庄内は賊軍ではない。これからは国の為に頑張れ」と言われ、荒地だった松ヶ岡を拓いて「絹産業」を興した。だから、鹿児島市と鶴岡市が兄弟都市（姉妹都市ではない）になっています。

#### 4. 民間の参画について

聞き手) 石原さんと佐藤さんにお伺いしますが、歴まち計画が進められているというのは、どういう段階からお知りになり、どの段階からご参加になったのでしょうか。

石原) 私は 23 歳から、庄内藩の藩主を祀る神社の神主になりました。恐れ多くも、城址公園の本丸にある神社に奉職しましたので、庄内藩を勉強すればするほど「様々な困難を乗り越えて平和で豊かな地」になったという歴史がわかりました。江戸時代が終わり明治になったのは 150 年前。庄内神社はその 10 年後に創建されました。誤解を恐れずに申し上げますと、領民に対して過酷な殿様一族だったら、神様として祭られない。来年は創建 140 年になりますけど。



鶴岡公園内堀

全国の城下町で本丸の址に殿様を神様にして神社をつくるというのはほとんど例がないのです。あつたとしてもお城の端っこの方とかに。熊本城の端には加藤神社があります。明治の庄内の人は、本丸址に郡役所は造らなかったのです。本丸には、殿様を祭る神社をと。二の丸址は城址公園として市民の憩いの場にしました。三の丸に官庁街、郡役所、警察署、裁判所、学校という風にしたまちづくり建物だけでなく城郭そのものを壊しても良かったのですが、壊さずにこうやって、300 年前の都市計画のまままだということも、殿様と領民との良好な関係からくるものがあると思います。この町を勉強すればするほど、文化財と言わなくとも、城下町の風致、風景は残していくべきものだと、強く考えておりました。今から 20 年前、40 歳のときに 鶴岡の観光協会の会長やれといわれたのです。鶴岡の観光協会は守備範囲が市街地。正に城下町そのものです。市街地を観光として発展させていきたいと思いますという会なもんですから。考えていくと、まちの真ん中に城址公園があつて、

この立地、他の街の人から見ると、奇跡ですねと言われる。ここは大事にしくちやいけないと言われて、半径 500m くらいの中に沢山の文化財、歴史的に重要な施設や史跡がある。国宝に重要文化財にいろいろあって、それを守って行きながら、観光施設だけの「点」ではなくて、この城下町エリアを「面」としてとらえ観光につなげて行こうということで、まち中観光を勉強しているところです。そういう中で、今回の、歴まちや、大賞をもらいましたなんていうのを聞いて、これは一緒に参加しようと思って、ワークショップがある時には、観光協会のみんなを引き連れて参加させていただいている次第です。

聞き手) たしかに、歴まちの取り組みをやっている中で一番激しいのは金沢城。お城の本丸にずっと金沢大学がありました。それを除去した後、櫓の復元。歴まちで本丸とかお城の復元をやりました。一方でひどいと思った県もあります。お城の中に県庁。どこが本丸かと探したら、同様な行政施設を建てている。お城をないがしろにしている文化もいろんなところにあります。



佐藤ひろこ  
歴まち meeting 代表

佐藤) 私の場合は、最初は一昨年ですかね、ちょうど、鶴岡市が歴まちの事業をいろいろやるというタイミングで、市民を集めてワークショップを開いたんです。たまたまそれに参加させていただいて、その中で鶴岡ホテルを初めて見学させていただくという機会があって、ものすごく素晴らしい建物で感動しまして、こんなに素晴らしい建物が鶴岡にあったんだなど、一昨年初めて知りました。あるということをもみんな知らない。みんなに見せてあげたいという気持ちになり、ワークショップに参加していた何人かを誘って、ここで何かやってみたいねという話を、市役所の方にご相談したら、鶴岡ホテルに話をしてくれることになって、次の年の5月に、イベント、藤の花の見えるいい季節に、市民のみなさんを招いて、ホテル内を案内して、ツアーを組んでというイベントを開催しました。それまで歴まちをわかってなくて。市の方にこれは歴まちだよと教えて貰って。その中で、城下町トラストという専門の方を紹介して貰って一緒にやることになりました。私自身何もわからないのですが、いろいろ教えてもらって、一緒にやらせてもらったのが初めです。

聞き手) そういう取組をして広がりを感じますか。

石原) 感じますね。特に、食文化が素晴らしいまちなのですね。これと「自分のまちを語れる事業」というのを観光協会で行っているのですが、車社会になって、歩かないとわからない見どころが沢山有るので、そこを見ながら、季節の鶴岡の食文化も感じようという企画をしましたら、大勢の人たちに参加していただきました。去年は12月に大黒様のお歳夜をテーマに行いました。冬なので人が来ないと思っていたら、沢山来ていただきました。今度は3月にお雛様の頃にやります。できれば、季節毎に、鶴岡にまつわるお祭りのご馳走とか、旬のものとか、そちらに発展させていきます。

佐藤) 私は、3回ほど、こういう市民の皆さんに鶴岡ホテルの中を見ていただくということをやらせてもらったのですが、市民のみなさんの興味が強くて、100人限定でもすぐに埋まってしまいます。最初は100人来てくれればいいよね、と思っていたのが、230人くらいの方が来ていただいて、昔の建物なので、やっぱり中に入れないので入場制限をかけて待ってもらって、ちょっとずつ回ってもらいました。2回目の時も、建物の周りを見てもらおうということになり、高校生の皆さんにも協力して貰って、その一日市通りのまちを眺めながら、鶴岡ホテルもちょっと見てみよう、ということもさせていただいて、ものすごく評判が良くて。前は、ちょっと違うことしてみようということで、ランチイベントみたいな50人限定でホテルの中でおいしいものを食べるという企画をしたら3日くらいですぐに定員が埋まってしまうくらい人気で、やっぱり、市民の皆さんは、歴史ある建物がものすごく好きなんだということを感じました。



旧鶴岡ホテルの公開・清掃事業

聞き手) 市長にお伺いします。世界遺産も含めて、食文化の取組を始めて、市の中で商売として食産業が発展しているという手ごたえはありますか。

市長) 基本的に、まだそこまで食産業のみなさんの動きが活発化してきているとは思えません。もう一つ言わせてもらえば、私はもともと民間で事業をやっていた人間として、鶴岡のまちなみ景観が壊れてしまった要因の一つに料亭の衰退があると思います。かつてはいっぱいあったんですけど、昭和50年代後半から平成にかけて、企業などの利用が少なくなくなって、貴重な建物などがみんな壊されてしまった。今、市内ではもう料亭として残っているのは本当に「新茶屋」しか残っていない。後から出来た割烹はあるけど料亭はない。私が大学を卒業してこっちに帰ってきたころは、指折り数えるほど料亭があって、一日市通り、昭和通りからなにかから、すぐそこには「祝屋」さんもあったし、七日町に「七尾」、「三浦屋」数えるところ全部酒呑んで歩いた。料亭などの文化が残されるべきだったのに、壊されてしまった。それによって、料亭の皆さんが鶴岡の食文化を繋いでいかなければならなかったが、それを繋げなくなってしまった。例えば、さきほどの石原さんがおっしゃった12月9日の大黒様のお歳夜も、この地域では、豆づくしとハタハタという食文化が残っていたが、そういうのが今は家庭の中でも繋がれてこなくなっている。



割烹三浦屋

今、一生懸命そういう文化を残そうとしている。市民の中でも、飲食のみなさんでも、若い人でも、せっかくそういう文化が鶴岡にあるのなら、今残しておこうと。できるだけ、昔から鶴岡で食べられていたものを継承していこうという流れが出てきている。藤沢修平さんの作品の中にもそういう食が出てくる。映画「武士の一分」で木村拓哉さんが最後のエンディングで「芋がら」を食べるシーンがまさにそれ。若い人たちには「芋がら」って何となるが、そういう食文化も含めて、長く地域が培っ

てきたさまざまな文化を若い人たちがもう一度見つめ直すという機運が出てきたのは大変良いことだと思う。

聞き手) 若い人が増えてきていますか？

市長) 若い人が働く農家レストラン。鶴岡には日本一といわれる農家レストランが二つもあります。最初に「知憩軒」、次が「菜あ」。いつも予約が取れない。これからどんどん出てくると思います。

聞き手) 成功例ができつつあるという感じですかね。

市長) 後は、市内に元々ある市内の飲食店が他をまねする必要はなく、鶴岡の在来の野菜を使った鶴岡の伝統料理を作ればそれでいい。今年の5月、石破創生大臣が来た時に「あなたのところは、日本で一番孟宗汁を食べる市だと言っていたので、食べたいと思い、お店に行ったけど、出しているところがなかった」と言われた。地域に伝わる食文化は店でなく自分の家でちゃんと食べるものなので



農家レストランの郷土食

石原) 他所で食べる文化はなくて季節の家庭料理ですのう。

市長) 昼飯食べに行っても、孟宗汁を他所で食べる人なんて誰もいない。それは食文化として残っている。ただ、家庭料理だけでも、他から来た人のためには、少し考えないといけない。そういう考えが市民の中から動きが出つつある。

聞き手) 佐藤さんのような若い人の目から見たらどうでしょうか。実感はありますか

佐藤) 新しいものよりも、古いものとか今あるものを大事にしていこうという風潮がだんだん高まっていると感じます。

## 5. 鶴岡市全体のビジョンについて

聞き手) 歴まちだけに話をしぼらず、市長はいろんなことを手掛けられています。そういう鶴岡市全の活性化というか、盛り上げていこうという全体構想の中での歴まちというものの位置づけ、もしくは歴まちが活性化につながっていくという市全体のビジョンがあればお聞かせ願えますか。

市長) ここには1400年の歴史をもつ、出羽三山という精神文化のバックボーンがまずあって、入部してからまもなく400年なる庄内藩酒井家が続いています。例えば、黒川能は酒井家の前の武藤家の時代から農民芸能として550年~600年という歴史があり、さらにこの黒川から波及して山五十川(やまいらがわ)に伝わる能の文化とか、歌舞伎の文化が残っている。それは酒井家が文化をこの地域に残してくれ、さらにここに致道館教育を広めてくれた。自学自習という、そういう下地があるからこそ、歴史的なバックボーンを土台として、いろんな文化を作り上げていこうという、そういう思いが私自身の中にあつた。私自身、政策に



黒川能

「鶴岡ルネッサンス」、5つの文化都市構想を掲げ、あらゆるものが鶴岡の文化という思いで進めています。5つ以外はないの、と言われたら、市長は5つ考えたけど、市民には6つあっても7つあっても良い。各々が俺の文化はこうであると思って歴史に裏打ちされた文化を盛りたてて貰えばいい。例えば、昨年JR東日本の企画で、今の酒井家18代当主を講師に招いた座学が、吉永さゆりさんの宣伝している「大人の休日クラブ」の会員を対象に東京で開かれました。1講座30人の募集に参加が70人。3講座やって、いまだにお殿様がいる鶴岡は、いろいろなことをやっている変ったところ面白いところだなと。じゃ行ってみようかなということで最後は鶴岡に現地見学に。それは、我々のところに非常に優れた文化、先人達が残してくれたものが残っているからで、鶴岡の市民性の一つに歴史的な建物や歴史的なバックボーンになっている。こうしたことを後世に受け継ぐ必要がある。

市長) 今造っている文化会館も変わった建物で、最初は怒られました。「市長、なんでコンパクトカーでなくて、スポーツカーでなければならないのですか」と。いいヒントを石原さんからもらった。明治時代に高橋兼吉に建てられた擬洋風建築。酒井家の致道博物館にある旧西田川郡役所、旧鶴岡警察署はじめ、大宝館もそうだし、鶴岡カトリック教会もそうだし、お城の参道のだ真ん中にこんなもの造ってとかなり怒られたそうです。しかし、酒井家の先代の忠明さんもやはり、こういうものはみんな残しておかないといけない建物だということで残してくれた。新文化会館の設計者、妹島さんも伝統的な建物の鞘堂形式を取り入れたり、鶴岡に城下町がつくられた時と同じように建物を山当てして、形が月山とか、金峰山にマッチするよう設計したのですと。本人は選ばれるとは思っていませんでしたと言っていました。

聞き手) スポーツカーを作るといってことでお造りになったんですね。

市長) スポーツカーの話は、フェラーリや新幹線のデザインも手掛けている山形県出身の奥山清行さんがそういう話をしていました。さすがと思っている。中身の文化が良ければ外はどうでもいいという話があり、ずいぶん叩かれましたが、真四角ならだれでも作れる。「後世に残すのであれば、世界に認められるものでなければ意味が無い」。

石原) ずいぶん非難されましたが、こうできると、「やっぱりいいよね」という声も相当聞こえて来ます。

市長) 自学自習という下地、バックボーンは一人一人の市民の中に市民性としてある。私は、山の中、山賊が出るみたいな所に住んでいるんですけど、鶴岡のまちに出て学んだことによって、或いは、藤沢先生の作品読んだり、いろんな本読んだり、論語読んでいるうちに、ひたすら学ぶことに対して貪欲であれということが身についた。

## 6. 観光と地域連携について

聞き手) もう一つ、観光の話をお聞きしたいと思います。お客さんがただ来ればいいという世界ではなく、今は一つの都市もそうですし、庄内地域というのもありますし、東北地方という結びつき、さらにはインバウンドを考えて、そういう観光をこれから進めていく中での地域間の連携ですとか、さきほど鹿児島兄弟都市もありましたが、そういう取り組みは進められていますか。

石原) インバウンドという言葉は、数年前から出てきて、そうだよ、と思いながら、その前から、鶴岡市は合併して10年ですけども、観光はずっと前から合併しておりました。観光連盟がそうですけど、鶴岡全部、合併前の鶴岡全部。三川町も入っているし、最上川舟下りの人たちも入っている。

観光で訪れた人は、鶴岡に行きます、とか、酒田に行きます、とかいう人は誰もいなくて、山形とも言いません。東北が見たい、見てない日本に行きたいという方々ばかりでした。今考えると。その中で、非常に短絡的に考えると、鶴岡市に3日滞在して欲しいと思うんですけど、そんな人はおりません。せいぜい一泊していただいて、そして次のまちへ。鶴岡を大変いい印象で残して欲しいねと。そういう意味では、本当にいい連携をとっている



国宝羽黒山五重塔と秋の峰入り

中で、市長がおっしゃるように、まち中は400年の歴史です。ちょっと奥に行くと羽黒山1400年の歴史。修験の文化。酒田にいくと湊町文化。ここだけでも、1泊2日、頑張って2泊して欲しい。さらに温泉もあるし。ということで、広域でやるのが観光だとずいぶん前から言われておりますので。それがインバウンドになっても同じと思っております。未だ見ぬところへ。外国の方は、京都もずいぶん見たと言ってます。富士山も見たと。浅草も見たと。浅草寺も。見ていないのは東北だけだと。東北が連携して欲しい。勉強して欲しい。

市長) 訪ね歩けば鶴岡は未知の魅力が一杯ある。例えば骨董品に非常に造詣がある樹木希林さん。10数年前、樹木希林さんが鶴岡の骨董品屋を探し歩き回っているぞと。それが何かというと、北前船です。北前舟でいろんなものが鶴岡に入ってきた。酒田の豪商本間家が米で利益を上げた。戯れ歌までね、「本間さまには及びもせぬが、せめてなりたや殿様に」という。殿様より本間様が上ですからね。だから米農家の蔵には当時の北前船で運ばれてきた瀬戸物とかいろんなものが一杯入っている。こちらの人は誰もそんなもの価値あるものと思っていないから、家を建て直す時に蔵ごとガラガラポンして二束三文でどうぞ持って行って下さいと。骨董品屋の店先に並べていたら、樹木希林が見つくて、なんでこんなものがここにあるのと。石原さんが言われたとおり、出羽三山があって、城下町鶴岡があって、酒田湊がある。

聞き手) 本当に北前船の通ったところは豊か。瀬戸内海を通過して大坂に続きます。

市長) 同じ東北地方の中でそういう北前船の歴史文化がある。また、それと合わせて「西の伊勢、東の奥参り」と言われるものもある。今ちょっと廃れていますが、出羽三山はお参りの聖地。旧来は、天台宗ですばらしい伽藍が残っている。随一のものが国宝の五重塔です。

聞き手) 地域、先ほど学校の話をしていましたが、地域の大学だとかがこういう歴史まちづくりに寄与するところはありませんか。

市長) 大学が鶴岡に出来たのは戦後まもなく。山形県立農林専門学校が山形大学農学部。鶴岡高専が昭和38年頃。東北公益文化大と慶応大学先端生命科学研究所が15年ほど前です。大学がここにあることによって、学ぶことに、もともと、いろいろと積極的に、地道に活動してきたところに、また新たな

に知見を吹き込んでもらって、より、いろんなことに学んでいこうということが醸成されたのは事実。物づくりはもともとありましたが、物づくりは高専が大きな役割を果たしてくれた。

一言だけ辛口のことを言えば、国立の先生にはもっと積極的に表に出て、どんどん研究や活動を宣伝して欲しい。私のところはこんなことをやっていますと。大学発のベンチャー企業が出て欲しい。農学部の方がむしろ今、フードビジネスの時代ですから。地域の資源、それこそ世界遺産なんですから。出番ですよ。

## 7. 他の都市へのエール

聞き手) 最後に、全国のまちづくりに取り組む人たちへ向けて一言エールをお願いします。まちづくりでも歴史でも何でも構いません。

佐藤) 私も歴まちに関わらせていただいていたと思いますが、いろんな人が関わらないと回らないですよ。

いろんな人が手を組んでやっていくことによって、より大きくやっていけるのではないかと思います。

石原) 人口が減るとか、過疎ですとか、人口はいっぱい居ればいいのではなく、適正な人口、昭和の初めほどのくらいあったのかとかそんなことを考えれば、そんなに悲観しなくともよいと思います。市長もそうですけども、前から思っていたのが、まさに交流人口が一番大切なことだと思います。それが国の光を見る、観光になると思います。ここは本当に光がある場所だと思います。それが、歴まちの計画と合わせてもっともっと進化していけばいいと思います。

市長) 私は地方都市を心配していないんですよ。逆に人口の問題で東京が一体どうなるのかと。我々の団塊の世代が東京には莫大にいますから。この方々が 2025 年になったとき、だれが東京の面倒を見るのかと。ここが一番の課題。地方にも相対的に団塊の世代がいますが、この頭の上の団塊の世代がいなくなると、うるさい連中がいなくなって、かえって生き生きとしたまちづくりができると思います。そういう意味で、常に、市民のみなさんが、生き生きとした、地域の中でまちづくりをしていける下地を行政が支えていく、やっぱり、市民が一番なんです。市民と地域の力を使わない限り、行政が先頭を走るだけではなかなか動かない。オート三輪みたいな形で、市民が一番前で、地域と行政が後ろの両輪で前に進んでもらえれば良いと思います。市民が活動しやすいことを作り上げていく。ただ、市民からテーマが出て来ないとすれば、行政が国の政策・制度を使って、こういうことがあるので市民のみなさん参画してもらえませんかという。そういうまちづくりができれば、市民と行政が一緒に動いていけるのではないのでしょうか。そんなまちづくりをしていきたいです。

聞き手) ありがとうございます。



聞き手 :

鈴木武彦 国土交通省東北地方整備局

建政部都市調整官

舟引敏明 宮城大学事業構想学部教授

## ○歴まち meeting

「歴まち meeting」は、市民の手で歴史まちづくりを実現していくため、鶴岡市内の歴史まちあるき地図「歴まちはじまりのマップ」作成ワークショップ参加者有志による市民団体として、平成 27 年 2 月に設立されました。

明治末期に建てられた市中心部の旧鶴岡ホテルの公開イベント等を実施し、子供たちも参加するなど、幅広い層と活動を行っています。



旧鶴岡ホテルの公開・清掃事業

写真：歴まち meeting 提供

## ○NPO つるおかランド・バンク

「NPO つるおかランド・バンク」は、中心市街地の空洞化を起こしている居住地域を活性化させ元気な街にするため、宅建業者、建設業者、司法書士、建築士、金融機関、そして、NPO 城下町トラストなどが参加する特定非営利活動法人として、平成 25 年 1 月に設立されました。

密集住宅地において、空き家、空き地、狭い道路等を一体的に整理、活用し、周辺の歴史的なまちなみと調和させるなど、生活しやすい環境に再生しています。



密集住宅地の空きアパートを活用しての短期留学生向けシェアハウス

写真：つるおかランド・バンク提供